

A市B町の生きがい活動通所支援事業（ミニディ） 参加者における高齢者うつの実態について

村上 久恵, 佐藤 裕見子, 田中 小百合, 田中 富美子

看護学部看護学科

【目的】A市B町の生きがい活動通所支援事業（ミニディと略す）参加者に対して、老年期うつ病評価

尺度（GDS-15）を用いてうつ状態に関する実態を明らかにする。

【方法】平成30年9月11日～14日にミニディに参加の65歳以上の高齢者23名に、2件法で基本チェックリストのこころの項目と老年期うつ病評価尺度（GDS-15）項目を質問紙で調査を実施した。うつ得点とその影響する要因をMann-Whitney U検定を用いて検定を行った。

【結果および考察】参加者の年齢77～94歳、平均年齢89.4歳±4.8であり、全員が女性であった。こころの項目得点で、2点以上の介護予防対象者は12名（52.2%）であった。GDS-15の得点は、1～12点とばらつき、5点以上のうつ傾向9名（39.1%）、10点以上のうつ状態3名（13.0%）で、合わせて約半数の人がうつ得点が高値であった。うつ得点に影響すると仮定した要因（同居者・足腰筋肉の病気・1回/週以上外出）の有無との間で検定を行ったが、調査対象者が少ないこともあり有意水準に至らなかった。

年齢と共に体力や身体活動能力の低下や物忘れといった脳の認知機能の衰えを自覚することで、本人も気がつかない内に高齢者うつの傾向になっているものと考えられる。

また、自主活動への高頻度参加者はうつ傾向が抑制されていると報告していることから、ミニディへの継続参加は、高齢の度合に関係なく、うつに対して良好な影響をもたらしていると考えられる。

アクティブラーニングとルーブリック評価法を用いた 実習のパフォーマンス評価の検討

仲口 路子, 伊賀 さくら, 清水 徳子

看護学部看護学科療養看護学講座成人・慢性期領域

【はじめに】文部科学省の「大学教育部会の審議のまとめについて（素案）」には、問われる学士課程教育の「質」として特に、高校までの受け身の勉強とは質的に異なる主体的な学びのための学修時間が今日においても少ないという大きな問題が指摘されている。そこで本研究では、学内での講義・演習授業では「アクティブラーニング」を、また臨床実習では「ルーブリック評価」を取り入れた「パフォーマンス評価」を考案し、学生の持つ力を存分に引き出す教育方法（ツール開発）を検討した。

【方法】研究デザイン：アクション・リサーチ

授業計画としてTBL（Team Based Learning）、グループ学習、協同学習を行い、授業プログラムを評価・検証する。実習ではルーブリック評価を取り入れたパフォーマンス評価の指針を作成し、評価・検証する。

【結果】昨年度は慢性期看護学にスイッチして初年度ということもあり、当初予定した内容での授業計画を十分に検討する事ができなかった。そこで、今年度の授業にアクティブラーニングを取り入れているので、今後その結果を評価・検討していく。また、実習評価としてのルーブリック評価表は原案が作成できたので、今年度の実習評価として使用し、以前のものと、実習の経験や達成度、学生の成長過程と満足度等について比較検討し、さらに修訂を重ねていく。

【考察】今後はアクティブラーニングで知識やスキルの蓄積、鍛錬を、ルーブリック評価法で、実習でのパフォーマンスレベルの向上をはかり、ひいてはモチベーションの維持向上や自己効力感を高めることで、国家試験への合格、そして臨床で輝ける看護師の育成という大きな目標を達成するために、それぞれが別ではなく、ひとつのしくみとしてのプログラムを開発していくことが必要である。

本研究は「2018年度明治国際医療大学学内研究助成：教育改革を志向した研究」を受けて行なわれた。